保育の見直し ―その二

少子化の時代、園児激減の年を迎えて

田中・朱美

はじめに

九十年代前半、私達の園にとって深刻な問題が起こりました。それは、一九九四年度の園児募集で、大幅に定数を割ってしまうという園児数激減の事態に直面したのです。

けれども、来年度から入園してくる子ども達や元町幼稚園を選んでやってくる保護者がいることを考えると、いつまでも同じ場所で足踏みしてはいられないと、皆で落ち込んだ気持ちをふるいたたせ、前向きな気持ちで歩みはじめました。

そこで、来年度に向けての話し合いがもたれまし

た。

「少子化の時代とは言っているが、他の幼稚園では定数を取っていると聞いている。ただじっと園児が集まるのを待つだけでなく、こちらから歩み寄ることが必要なのではないだろうか」

「保育形態をかえてから十六年になるが、子ども主体の保育が定着するにつれてこの保育の中身や良さを伝えていく機会が少なくなった。子ども主体の保育の大切さや、成果などをもっと親たちへアピールしていくべきではないか」

「今の世の中、高学歴の親が多く子どもに対して高い理想を抱いている。以前に増して幼稚園選びをする目も厳しくなってきた。そんな親達へどのようにこの保育の良さを伝えればいいのだろうか」

など、親側のことを考えた意見が多く出されました。そして、幾度も話し合いを重ね、出しあった案を慎重に具体化していきました。

『幼稚園の良さをどう伝えていくか』

1　未就園児の保護者へ

―入園説明会を考える―

幼稚園選びをする親に対して、幼稚園の中身や良さを伝えるための「入園説明会」。その内容を決めたり進行していくのは、ごく限られた職員のみでした。

しかし、園児数激減がきっかけになり、職員間から疑問の声があがりました。園児募集の一番大切な日を一部の職員に任せていていいのだろうか。もっと自分達の問題として考えていくべきではないか、などの意見が出され、その後、入園説明会の内容検討の際に職員全員の意見が取り込まれていくようになりました。

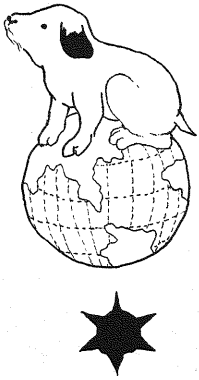
以前の説明会の主な内容はミニ講演会に近く、例えば今の世の中で起きているさまざまな問題を取り

上げ、子どもにとって親にとって何が必要なのかを知らせ、そこから幼稚園で大切にしていることやこの保育で育つことなどを話していました。

例えば、核家族の問題や家庭崩壊など。

しかし、園児数激減という問題に直面し、今までの幼稚園の方針を一方的に投げかけるだけでは親たちの心は動かせないのだということを痛感しました。そこで、それまでの親をなんとか説得しよう、この保育の良さを分からない人はいないはず、などの考え方を改めもっと親の気持ちを汲み取ったり、親の立場にたって考えていくことを心掛けていくようにしました。

「幼稚園に入れたらどんなことができるようになるのかしら？」「先生は、どんな風に接してくれるんでしょう？」「うちの子、手を出しやすいから友達とうまく遊べるかしら」「三歳から入れたほうがいいって言うけど、まだ親元の方がいいんじゃないかしら？」などお母さん達の抱いている不安や戸惑いの気持ち、素朴な疑問などをとりあげて説明会の内容をそれに合ったものにしていきました。



さらに、内容がマンネリ化にならないよう、前年度の親や子どもの様子をふまえ、今年は説明会でどんな話をしたらいいのだろうか、という話し合いを職員全員でするようにもなりました。例えば、スライドを使って幼稚園の一日の流れや行事、保育者のかかわっている場面などを紹介したり、現場の保育者から子ども達との関わりを通じてどのように一人一人を大切にしているかなど、具体的な保育の話を

したこともありました。

―体験入園の始まり―

保育を見せる、保育を体験してもらう

説明会の中だけで、元町幼稚園の保育を伝えるには、限りがありました。また子ども主体の保育や、一人一人を大切にしていることなど、入園してからでないとその良さを理解してもらえないことが多く、私達はもどかしさを感じていました。そこで、実際の保育を見てもらったり体験してもらうのはどうだろうか、という今までにない新しい発想が生まれたのです。

体験入園に参加した親子が、保育者の実際の関わりを見たり体験したりすることで一人一人にあった保育を心掛けていることを実感し、それぞれの親子が参加して良かったと思えるためにも、少人数のあたたかい輪の中で行えるような内容にしました。また保護者からの質問にも丁寧に答えていくよう心掛けて、体験入園のやり方や内容は次のような形になりました。

〈『体験入園』の一日〉

・保育室の中に、遊びのコーナーと親子で集える場所をセッティング。

・はじめに、親子で簡単な手遊びなどをして子ども達の気持ちをほぐす。

・遊びのコーナーを紹介し、子ども達を誘う。子ども達が選んだ遊びがより楽しくなるように援助したり、また一人一人の心の状態にあわせて接する。

・子ども達が遊んでいる間、親側に子どもの様子や保育者の関わりを見てもらい、保護者担当の職員が質問を受けていく。

・遊びの時間のあと、保育者が絵本の読み聞かせを

する。

・最後に、子ども達とかかわった保育者がその日の遊びの様子をカードに書いて、在園児が作った手作りおもちゃと共にプレゼントする。

体験入園の他にも、保育見学日を設け在園児の保育の様子を見せて場面場面に応じた説明と、親からの質問を受けました。

―入園前の親子の支援―

このように、以前にまして入園前の親子と接する機会が増えたことで、母親の抱えている育児の悩みを相談できる場が少ないことや、同年齢の友達と遊ぶことが少ない子ども達の体験不足といった現実を知りました。そこで、未就園児の親子を対象にして、幼稚園の一部を解放し、一九九五年『あっぷる広場』を開設しました。

あっぷる広場は、月二、三回の割合で開かれています。責任保育者が子ども達の保育や母親の育児の相談を担当し、入園前の親子が触れ合い、共に育ちあうことを目的としています。この支援活動を通しても、元町幼稚園の保育をより多くの方々に知ってもらうことができました。

2　在園児の保護者へ

―子どもの成長を通じて幼稚園の良さを理解してもらうために―

これまで、入園前の保護者へのさまざまな啓蒙の形や内容を報告していきましたが、実際、幼稚園に通っている保護者がどのくらいこの保育の良さを感じ取っているのかということも大変重要な点でした。

やはり、保護者がこの幼稚園で良かったと思えるのも、子ども達の姿や成長を実際に目にすることができたり、実感できる時ではないでしょうか。

そこで私達は、入園後も、よりこの保育を理解し

てもらうための努力を続けていきました。特にこの保育は、遊びや人との関わりの中で子ども達が成長していくため、子ども達と関わりあっている保育者でなければ分かりにくいことが多く、またその成長を見抜く目も必要でした。

そこで、子ども達の成長を目に見える形で親に伝えていくために、諸行事で子どもの成長を伝えているのはもちろんのこと、日々の保育記録をもとに一人一人の成長を文章にして、毎学期ごとに保護者に配布することにしたのです。

その名を『成長の記録』とし、文章の他に時期や伝えたい内容に応じて写真なども載せていきました。また、親側からも、感想や親としてふりかえって思うことなどを書いてもらいました。

今後の課題

―時代の流れを読み取りながら―

園児の激減というマイナスの事態を「もう一度考え直すチャンスがきた」とプラスに考えて歩み始め、今日までやってきました。努力のかいあって翌年から定数をしっかり確保できるようになり、在園児の保護者からの信頼も徐々に得られるようになりました。

私達は、これからも子どもと親のニーズを共に満たすことのできる保育を目指していきたいと思います。しかし、街中の小規模幼稚園が二つのニーズを共に充実させていくことは、決して容易なことではありません。実際、保護者のニーズに応え続けてきたことによって、保育者をはじめとする職員全体の精神的、労働的負担が許容量をこえつつあります。今後は、保護者のニーズにこたえ続けるだけでなく、変化する時代の流れを読みとりながら今何が一番大切なのかを考え、私達がやるべきことを選択しながら前進していくことが課題だと思います。

（横浜学園付属元町幼稚園）